

交流・体験活動の創り方

(1) 交流・体験活動の企画

子どもを対象とした教育活動の手段として交流・体験活動を実施するためには、体験を用意して実施すればよいのではないことを 章の最後に述べた。交流・体験活動が社会教育や学校教育の中で種々の課題を解決する方法として数多く展開されているが、「体験するだけ」にならないことが大切であると力説されている。つまり体験を学習に結びつける「体験学習」としての方法、理念を企画者は正確に捉え、事業の企画と運営を進めることが大切である。

ア 体験学習法と体験活動の流れ

体験学習法について

体験学習は、参加者の主体的な学習が展開できる様に、ファシリテーターと呼ばれる学習の支援者、促進者が関わる学習である。あくまでの学習者（事業においては参加者）が中心である。青少年の交流・体験事業ではファシリテーターとは、各グループのリーダーと考えられる。ファシリテーターはあくまでも参加者の効果的な学習とグループとしての課題解決が進む様な援助的な枠割りが中心である。

体験学習のステップは図 8 のとおり「体験（Experience）」「指摘（Identify）」「分析（Analyze）」「仮説化（Hypothesize）」の 4 つの過程が循環してさらに次の新たな体験に向けての成長が期待できる学習法である。

「体験（Experience）」：個人、集団で具体的な活動を行う。実際の学習教材。

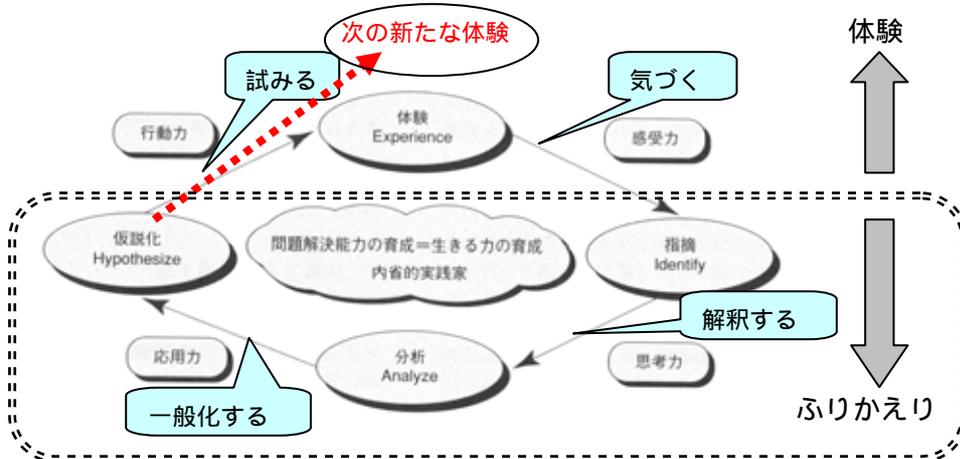
「指摘（Identify）」：体験の中で何が起こっていたのかプロセスに焦点を当てる。

「分析（Analyze）」：活動のプロセスにこだわってその起こったことを考察する。

「仮説化（Hypothesize）」：次の体験に向けて集団や個人がどのように行動するのか仮説を立てる。

仮説化の次は体験に戻るのであるが、それは同じメンバー、同じ活動であってもまったく新しいプロセスとして新たな体験となり、体験学習としての学びが大きくなる。

図 8 体験学習のステップ（津村、石田「ファシリテーター・トレーニング」2003 改編）



P D C A サイクル

交流・体験活動を教育として展開する場合、体験学習法の理念が大切であることは前述のとおりであるが、その交流・体験活動を運営する担当者としても、その事業の実施(「体験」)を自分自身でふりかえる(「指摘」「分析」「仮説化」)ことが重要である。この場合考えやすい理念として「P D C A サイクル理論」がある。P D C A サイクルとは、もとは工業生産の品質管理、生産管理で考えられた理論であるが、継続的な事業の改善を可能にすることから教育的な活動にもその理論は数多く取り入れられてきている。

「Plan」「Do」「Check」「Action」次の「Plan」へというサイクルであるがそれぞれ次の意味である。

Plan : 企画、計画。今までの実績、参加者の状況を予測して企画する。

Do : 運営、実施。企画した内容に沿って実行する。

Check : 点検、評価。実施した内容が企画に沿って進行したか確認する。

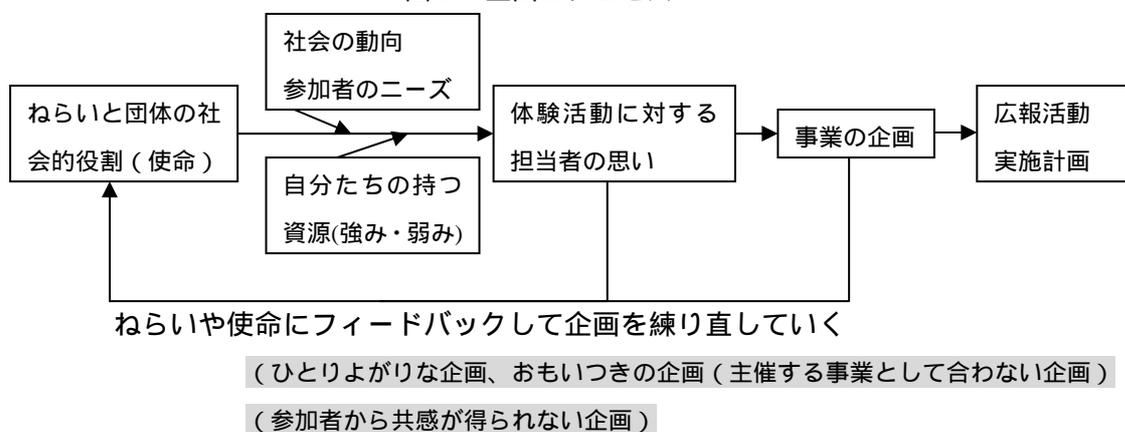
Action : 処置、改善。実施した内容が企画に沿っていない部分を調べて改善をする。

この流れについては事業運営を日常から実施している場合、特別な準備や理論的構築が必要ではない。ハンドブックに記述している企画の留意点、評価について再確認した後に目の前にある進行中の事業で実際に確認してみるという作業が大切である。

イ 交流・体験活動企画の大切な視点

交流・体験活動の企画のプロセスは藁谷の作成図を参考に考えると以下のとおりである。

図9 企画のプロセス



自分たちの使命、事業の目的は何か

体験活動を企画する主体はどこであるか。首長部局、教育委員会の部局といった行政であるとしたら、行政機関として事業を企画する使命は何であろうか。やはり、現代社会が抱えている問題、地域社会に取り巻く課題の解決、あるいは良い方向へつなげるための教育的な活動のため、さらには地域で展開している交流・体験活動実施団体へのモデル的事業の普及として実施することが使命であり、それにより参加者、地域に期待する変化が認められるという目的を達成することであろう。

交流・体験活動によって「自然環境を考える知識」を学ばせたいのか、「他人を思いやる気持ち」を育みたいのか、「チャレンジする行動」を起こしたいのか、それぞれの事業として団体の使命に照らし合わせた具体的な目的を考える必要がある。

社会の動向、参加者を取り巻く現状を分析（社会と人々のニーズは何か）

社会的な課題は何か、何が求められているのか、他の団体や関係団体の動向はどうであるのかについてリサーチする。今までやってきた事業をもう一度問い直すことも必要である。本当に社会、人々のニーズに答えている事業内容であるのか。

自分たちの持っている、協力が得られる力（ポテンシャル）を洗い出す

事業実現のために持っている予算、人材、ネットワーク、施設・設備は何かあるのか。また、自分たちになくともネットワークの中で使用できるもの、協力が得られる者には何かあるのかを検討する。自分たちの持っている強みというプラスの面ばかりではなく、弱みについても十分検討しておく必要がある。限られた時間、予算、事業展開する場所が決まっている等についてもチェックすることが必要である。

使用する施設やフィールドが決まっている場合は、その施設の持つ設備、専門指導者やボランティアなど人材、フィールドの持つ自然環境や文化的資源などについて十分な情報収集と実地踏査を行い、その資源を十分生かした企画が大切である。

企画者の意図（思い）を明確にする

団体の使命の事業の目的を考えながら、交流・体験活動で自分は参加者に何を伝えたいのか、何を感じて欲しいのか、どんな交流を生みたいのか、その交流体験でどんな気持ちを育み、日常に生かして欲しいのかなどについて担当者は本当にそう思うのかよく考えてみるのが大切である。

自分がその事業をイメージして参加者の笑顔、満足した表情が浮かんでくるのか。最も重要なのは、事業に笑顔で運営している自分がそこにいるかどうかであろう。

立てた企画について対象者を理解し、もう一度団体の持つ使命とねらいを問う

自分の事業への思いが強すぎてそれが実は「ひとりよがりな企画」「ニーズに答えていない」企画であったりすることがある。対象者の課題を教育的に捉え、心身の発達段階を考え実施しようとしていることが対象者に適していることなのか、どのくらいのニーズがあるのかについて考え、事業として成立するかどうか考えてみる必要がある。

担当で考えた後に他人とディスカッションしてみる、自分の思いと構想についてプレゼンをすることが重要である。プレゼンで作成する文章や概念図などがより自分の考えを明確にしてくれるはずである。

交流・体験活動の企画に大切な6W2H

交流・体験活動の事業企画をより具体化するうえで大切なことは、次の述べる6W2Hである。この6W2Hをひとつひとつ具体的に考えることにより企画の基本形が完成する。また、この6W2Hがそのまま参加者募集のチラシなど広報の原稿となる。

Why : なぜ (目的)

前述したが、最も重要なのは、なぜこの事業を行うのか、何のために行うのかということをはっきりさせ、担当部局や運営スタッフに明確にすることである。

Whom : 誰に対して

対象者を把握することが参加者の満足いく事業展開のカギとなる。人数は？年齢は？年齢の幅は？活動経験は？参加者の居住環境は都会？農山村地域？事業への興味・関心は？

Who : 誰が

指導者は誰なのか。グループリーダーは、専門的な技術指導者。安全管理の責任者は誰かなど、指導体制を組織し、その役割を明確にすることが大切である。

When : いつ

季節は(暑い、寒い)？時間帯は(暗い、何時間行つか)？など活動に適した時間、参加者の適した時間を考える必要がある。幼児のプログラムで夜8時以降キャンプファイヤーを考えたも、皆寝ているだろう。また、自然体験活動では、季節と時間は重要であり、海辺の観察の潮汐表、星空観察における天文年鑑などなど重要な情報であると言えよう。

Where : どこで

交流・体験活動を行う施設、フィールドを知る。自然環境、文化的遺産としてどんなものがあるのか。また、活動するフィールド周辺の安全救急施設の情報、地理的な危険、危険な生物などの情報は事業の安全管理として必須の確認事項である。細かいことでは研修室の大きさや設備・備品は何があるのかについても確認しておかないと事業展開に支障を来すことがある。

What : 何を (どんなアクティビティを)

交流・体験活動のそれぞれのアクティビティ、プログラムの進行を考える。前項のねらい、参加者、季節、フィールドを考え適当な活動を企画する。事業全体のねらいや活動を示す事業名の工夫も重要。

How : どのように、どのような方法で

広く捉えると事業の目的を達成するために、実際の交流・体験活動の前後でどのような事前学習と事後学習により目的を達成しようとするのかなどであり、詳細に考えると「何を」に当たる活動それぞれをどのように展開していくのかという問題である。1人で行うのか、グループで行うのか。それぞれの体験をどのように共有するのか。活動それ自身の持つ教育的価値をさらにアップさせられるかどうかはこの「How」にかかっている。

How Much : どのくらいの予算で

担当者の熱意は重要であるが、実際にその事業ができるかどうかはやはり予算とどの部分にいくらの経費をかけるのかについて十分な検討と経理担当者との情報交換が必要である。予算を無視した良い事業などあり得ないのである。この経費の積み重ねと予算により参加費の設定につながる。

ウ プログラムデザイン

交流・体験活動の企画には目的を達成するための効果的なプログラムデザインがある。自

然体験活動や環境教育を展開する指導者養成の考え方としてアクティビティとプログラム、プログラムデザインという考えで整理すると企画としてプログラムを考えやすくなるのでここでその手法について解説する。

アクティビティとプログラム

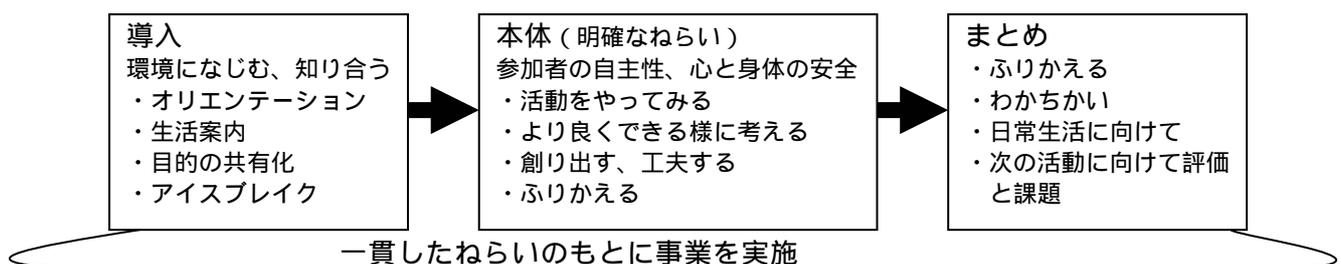
アクティビティとプログラムを明確に分けて考えると、アクティビティは活動それ自体と考えられ、例えば1日かけて行う登山、そうめん流し体験、外国のあそび体験などである。プログラムは、アクティビティをつなげて1つの事業としてまとめたものである。日帰りのプログラム、9泊10日のプログラム、年間日帰り10回の通年型プログラムなどである。アクティビティを製造物で考えると個々の部品(例えば自動車のハンドルやブレーキ)であり、プログラムはできあがった製品(自動車)である。

交流・体験活動では、数多くの体験があり、その体験を行う深さと広がりがあるが、それぞれがアクティビティであり、それぞれの体験活動をどのように組み合わせて実施するかを考えて完成させたものがプログラムである。

プログラムデザイン

プログラムデザインとは前述のとおり、交流・体験活動の進行を考えることであるが、何でも提供すれば良いというものではない。人間には何かを習得するのに最も適した時期と状態(レディネス)があり、そこで習得していくことが効果的である。アクティビティもその内容によっては体験する順番として適した時期があり、順番がある。起承転結や活動の流れを考えることが大切である。自然解説者のインタプリター入門書には「つかみ・つなぎ・本体・まとめ」という4つの要素で自然解説を構成する方法が紹介されており、ネイチャーゲームの考案者ジョセフ・コーネル氏も「熱意を呼び起こす・感性を研ぎ澄ます・自然を直接体験する・感動をわかちあう」という4つの段階を経過して指導する「フローラーニング(流れのある学習)」の効果を述べている。

図10 プログラムデザインの概念図



プログラムデザインとして、野外炊事というアクティビティをどのようにねらいと一貫性を持たせるかについて、次のようなねらいとの連動性で考え、「グループで協力するだけの野外炊事」ではなく「事業全体のねらいとの調和」した野外炊事として、

自然環境を考え、行動することをねらいとした交流・体験活動事業では、

「環境に優しい野外炊事(材料&調理法&ゴミ処理)」

地域文化のことを知る、地域間交流・体験事業では、

「地域の産物を利用した野外炊事」
身体的チャレンジ体験を中心とした交流・体験活動では、
「原始体験に挑戦するキャンプ」（かまども使わず、火打ち石などを使った火起こし）

エ 事業形態の違いによる企画と運営の留意点

体験活動の事業形態には、いろいろな形態があるのでいくつか代表的な事業の企画の留意点を挙げる。

宿泊型事業

- ・長期にわたる事業が考えられるので、メインとなる心身共にストレスのかかる活動の前後にはリラックスした活動を配置する。
- ・宿泊ならではの共同生活体験を重視し、夜や早朝の体験活動を有効に配置する。
- ・参加者の自主性と自主的な問題の解決を促す。
- ・活動地までの移動も活動として考える（バスの移動中の活動、現地集合の方法など）
- ・異年齢で構成されたグループで体験活動を実施していく場合、年長者にはリーダー的役割を期待することもある。それが続くと負担になる場合もあるので、グループの活動と個人の選択活動や同年齢で構成する活動などグループを解体する活動を効果的に配置する。

（日帰り）通年・シリーズ型事業

- ・1回目は運営スタッフ、指導者、参加者全員で交流する体験を用意し、事業のねらいが共有できる仕掛けを作る。
- ・各回の明確なテーマとシリーズ全体を通したねらいを明確にする
- ・期間が離れている場合、季節に応じた活動と、その間の情報発信に留意する。
- ・1回ごとの完結型事業とする（次の会に参加できない者もいる）
- ・多種多様な体験を用意するか、1つの活動が深まるような展開とする。この場合、個人による差はあるが参加者全員の技術の発展が成し遂げられるように配慮する。

イベント型事業

- ・早めに事業計画を確定し、時間と幅広い広報活動を展開する。
- ・参加者が不特定多数となる場合がある。参加者に対する情報の正確性を徹底する。
- ・いろいろな体験活動の中から選択できるような配慮をする。
- ・参加者の年齢、活動フィールドが広範囲に及ぶので安全管理には十分気をつける。
- ・参加者が多くなるため、運営スタッフも多くなる。スタッフ全体の情報の共有と役割分担による運営組織を明確にすることが大切である。

引用・参考文献

- ・中野民夫、「ファシリテーション革命」、岩波書店、2003
- ・津村俊充、石田裕久編、「ファシリテーター・トレーニング」、なかにしや出版、2003
- ・長期宿泊活動研究会、「体験を通して学ぶ教科学習のすすめ」、国立青少年教育振興機構、2008
- ・藁谷豊、青木将幸、「おもい・つどい・はじめる森林環境教育プランニング事例集」、2000

(2) スタッフ研修のカリキュラムと内容

子ども交流・体験活動を企画・運営するにあたり、主催者はもとより、関係スタッフの心構えや意識統一、また基礎知識及び基本技術の習得が事業成功のカギを握る。

そこで、ここではスタッフ研修のカリキュラムと内容をまとめた。

ア 概要の理解（意識統一）

事業を行うにあたり、事業の方向性をスタッフ全員が理解し、仲間を知ることによってチームワークを高める。

自分が参加する事業の目的を理解する

「子ども交流・体験活動」というねらいで、目的を達成するための手段として事業を行う場合、その事業の「意図や目的、ねらい」を具体的にし、その内容をスタッフが理解し賛同を得ることにより、スタッフに自主性・自発性が芽生えることをねらう。

自分が参加する事業の組織を理解する

運営するための役割分担を示す「組織図」を作成し、自分がどの立場で何を担当し、他にどんな役割があり、自分とどう関わっているのかを理解する。

一緒に事業を行うスタッフ及び関係者を理解する

事業に関わる、主催者・スタッフ・指導員・地元協力者等と顔合わせを行い、お互いの立場や思いを理解し、それぞれが最大限のパフォーマンスを発揮できるようにコミュニケーションを図る。

イ 基礎知識の習得と自分たちのルール創り

企画・運営の際に必要な基礎知識や情報を収集し、現場で必要なルールやマナーを身につける。

一般常識レベルの基礎理論研修 下見で実践研修・練習（体験学習による感受性の育成も兼ねる）と情報収集 オリジナルルール作成する発展研修、と進めていくとより効果的に生きた知識が得られ、実践で活用できる観察力・判断力が身に付く。

目的を達成するためのルールやマナー

消灯時間や、アクティビティに見合った身だしなみ、また、川遊びや海での活動範囲や立ち入り禁止区域の設定、危険行為の禁止など、事故を未然に防ぎ、健康で楽しく目的を達成するために必要なルールやマナーの必要性を理解しルールを創る。

他の施設利用者とのトラブルを避けるためのルールやマナー

プログラムの開始の遅れや延長、必要以上の場所取り、共同スペースの乱雑な使い方や共用備品の放置など、他の施設利用者に迷惑がかかる行為を理解し、使用施設のルールを事前に確認して、他の利用者とトラブルを起こさない方法を考える。

安全に指導する際のルール

参加者と指導者（スタッフ）の関係では、指導者側は参加者の安全を確保するという

重大な責任を負っている。指導者の注意義務には、「危険予知義務」と「危険回避義務」の2つがあり、双方への対策に必要な知識や情報を収集し、理解した後にアクティビティを検討し、企画と準備をすすめる。

「危険予知」とは、事前下見調査による場所の設定や天候による事業の実施判断、参加者の能力とアクティビティの適性など。

「危険回避」とは、立ち入り禁止看板や案内表示の設置、監視や救助体制の整備、急な天候変化や参加者の疲労・集中力の低下に伴うアクティビティの中止など。

事故が起きた場合のルールやマナー

事故が起きた場合のルールとして適切な応急処置と正確な報告が求められ、マナーとして被害者への誠実な対応が必要である。

事故報告書や傷病メモを作成し、スタッフに配布しておくこと正確な報告の手助けとなる。

また事故の備えとして、傷害保険、賠償責任保険への加入は、参加者・スタッフともに不可欠であることを認識し、指導者（スタッフ）はどのような行為によって責任が問われるかを過去の事例で知っておくとよい。

自然環境に配慮するためのルールやマナー

自然の中で活動する際は、自然環境への影響をできる限り最小限で活動するマナーを身につけ、地元関係者の指導や助言を尊重する。

（参考 リープノートトレイスの7原則）

1. 事前に計画し準備すること
2. 影響の少ない場所を選んで活動やキャンプをすること
3. ゴミは適切に片付けること
4. 自然の中で見つけたものは持ち帰らないこと
（山菜や茸の収穫、昆虫や植物採取は、地元関係者の指導の下、許可を取ること）
5. 焚き火の影響を最小限にすること
6. 野生生物を大切にすること
7. 他の訪問者のことを思いやること

個人情報を取り扱うためのルールとマナー

安全に楽しく、参加者が過ごせるように、参加者の健康調査や緊急連絡先、友人関係等の情報を事前に知っておくことは大切である。

また、本番中の参加者をよく観察し、記録をつけることは対象者を理解する上で大切なので、対象理解に役立つ記録用紙や日誌を作成するとよい。

しかし、これらの情報は「秘密厳守」の個人情報にあたるので、取扱いに十分注意するためのルールを作成すべきである。

ウ 基本技術の習得のための実践練習

アクティビティの体験研修や指導法の理論と実際を相互評価による研修、救急法の実践研修などを知っている、やったことがあるレベルではなく、スタッフとして与えられた役

割が遂行できるレベルの技術習得が求められる。指導できるレベルが必要なのか、参加者の安全に配慮しながらアクティビティと一緒に楽しむ補助的レベルでよいのかによって、スタッフに求める技術習熟度は異なる。

アクティビティ企画シートを作成し、自分の役割と習得すべき技術レベルを明確にする

アクティビティ企画シートに「ねらい、対象、指導者、時間配分(進行案)、活動内容、準備物、指導上の留意点・安全管理等」の項目をまとめることで、達成すべき技術レベルが明確になる。

本番までに必須技術の習得が望めなかったり、高度で専門的なアクティビティを企画するならば、専門の指導員を要請するのも1つの方法である。

目的に合った振り返りシートを作成して、技術習得の度合いを把握する

<例1> 研修記録用紙(全体用)

項目: 講師・研修目的・内容・習得したこと・受講生の習熟度・良かった点・改善点・今後に向けて等

<例2> アンケートや評価シート(個人用)

項目: 習得技術項目・達成自己評価・満足度・反省・今後の目標・希望等

エ 事業当日に向けての心構え

研修の最終仕上げとして、成功をイメージしてモチベーションを上げていくことが事業の成功につながる。そのためには、事業の目的を再確認し明確な「目標」を設定することである。

全体目標と個人目標を掲げ、「目標達成」に向けて事業当日までにできることを、自主研修したり、オリジナル資料を作成したりして事業へのモチベーションを上げていく雰囲気作りを心掛ける。事業終了時には、ふりかえりシート(評価シート)を作成して、結果をまとめて分析し、目標達成率や改善点、今後の課題や継続すべき成功事例などをまとめる。

以上は、特定の事業を達成するためのスタッフ研修の流れをまとめたものであり、スキルアップのためには以下のような機関で開催されている講座・講習会を利用するとよい。

<救急法>

- ・日本赤十字社愛知県支部 <http://www.aichi.jrc.or.jp/>
- ・各自治体消防局 救急法講習会

<交流・体験活動の実際>

- ・独立行政法人国立青少年教育機構 <http://www.niye.go.jp/>
- ・NPO法人自然体験活動推進協議会(CONE) <http://www.cone.jp/>
- ・財団法人日本レクリエーション協会 <http://www.recreation.or.jp/>
- ・社団法人日本キャンプ協会 <http://www.camping.or.jp/>
- ・社団法人日本ネイチャーゲーム協会 <http://www.naturegame.or.jp/>

引用・参考文献

- ・社団法人日本キャンプ協会、「キャンプ指導者入門」、2006

(3) スタッフ研修の実際

それでは、平成 20 年度 子ども交流・体験活動推進事業にアドバイザーとして参加した(財)愛知県教育・スポーツ振興財団の「つくろう友だち!体験しよう自然! n旭高原」の運営会議を参考に、スタッフ研修の実際を紹介する。

ア 運営会議の内容と研修要素

(財)愛知県教育・スポーツ振興財団の運営会議は全部で3回実施され、加えて現地での事前研修会を1回実施した。会議に参加した構成員は、「総本部長・現地本部長・現地受け入れ先施設代表者・主催者総務・主催者運営スタッフ4名・活動スタッフの学生キャンパカウンセラー代表2名・アドバイザー1名」の計11名。

事業実施3ヶ月前・・・第1回運営会議(平成20年6月4日)

「事業の趣旨・運営体制(案)と活動プログラム(案)提示・広報計画(案)の提示」

第1回の会議では、まず概要の理解(意識統一)に必要な「目的・組織・スタッフ及び関係者の理解」が行われ、スタッフの方向性が1つになったところで、活動プログラムの内容の検討に進んだ。

事業のねらいを明確に理解した後に、ねらいを達成するために適したアクティビティ検討の話し合いが行われたため「プロジェクトアドベンチャー(PA)」の要素を取り入れたアクティビティを実施することとなる。この時、学生カウンセラーは「プロジェクトアドベンチャー(PA)」を知らなかったため、本番に向けて身につけるべき知識と技術課題が見つかった。

* プロジェクトアドベンチャー

プロジェクトアドベンチャーとは、1970年代にアメリカの教師が中心となって考えた活動で、冒険的体験活動の要素を取り入れた人間形成プログラム。

参考: プロジェクトアドベンチャージャパン <http://www.pajapan.com/>

事業実施1ヶ月前・・・第2回運営会議(平成20年7月23日)

「参加申込状況・運営組織・活動プログラム・緊急時の対応・事前研修について確認」

第2回の会議では、参加する対象者の地区・性別・学年の集計結果が提出され、参加者の個人情報を収集するための送付書類が用意された。また、緊急連絡体制及び保険の案内・荒天に対する対応が明示され「対象理解・個人情報・安全・事故」に対する準備が整った。

組織の体制が整ったところで事前研修の内容を検討し、事業の実態に合ったルールを創り事前研修にてスタッフに周知する、という理想的な展開でマネジメント面の準備が進んだ。活動プログラムも具体的になり、自然に対する考え方やアクティビティのねらいの確認の話し合いが行われ、スタッフ中で実際の指導がうまくでき、参加者が満足している成功イメージを持つことも求めたい。

事業2週間前・・・事前研修会(平成20年8月12日) *実施スケジュール参照

「安全管理の基礎知識及び応急手当の基礎知識・日程シミュレーション・実地踏査」

第1回、第2回の運営会議を経て、事業を行う現場にて「危険予知と危険回避」の基礎を学び、実際に使うロケーションにて危険箇所の発見と安全対策を練る。

実際の活動場所で行う研修は、安全や事故に対する具体的なイメージが創りやすいため、よい緊張感の中で集中して安全法及び救急法を学ぶことができる。

また、アクティビティの運営では、具体的な運営方法の最終確認の段階となる。準備物の手配先や準備にかかる時間、移動距離や留意点等、現地でシミュレーションをすることはじめて気づくことも少なくない。スタッフが自分自身の足で歩いて目で見体験して、本番をより円滑にそして安全に運営できるよう計画を練り直す。その際、雨天時の対策も忘れずに行うことが重要である。

実地踏査では、使用施設のきまり（ルール）や避難経路（非常口）を確認し、持ち帰って参加者にもわかりやすいように掲示物や資料を作成することが必要である。また、現地特有の天候や、害のある植物や動物などの情報を収集することや、緊急医療施設や災害時の避難場所にも行っておくべきである。

事前準備もほぼ終わり事業当日を迎えるにあたって、もう一度「ねらい・目的」を確認し、成功イメージを確立し、全体及び個人の「目標」を明確にして、モチベーションを上げる努力と工夫をすることが大切である。

事業当日（平成20年8月26日～28日）

「ふれあいゲーム・アドベンチャーラリー・星のお話・森の散策&木のフォーク作り・ピザ作り・木のはがき作り・バーベキュー・キャンプファイヤー・カヌー体験」

事業終了2ヶ月後・・・第3回運営会議（平成20年11月6日）

「事業実施についての主催者評価・アンケート集計結果報告・スタッフの自己評価他」

事業の実施報告では、主催者側からの主観的な視点より、個々のアクティビティのねらいと効果についての評価を行った。

それぞれのアクティビティに対しての具体的な反省は、次回の参考資料として貴重な情報源となるので、しっかり記録しておくことよい。

安全対策として、雷に対する判断について課題が残った。天候や地形に関する状況判断は大変難しく、事前調査や情報収集をしっかり行った上で、地元の有識者や指導者に意見を求め、その都度、現場にて慎重に判断すべき事項である。体験させたい気持ちに左右されず、冷静な判断ができるよう心がけるべきである。

反省会などで出された課題は、次回の改善と検討事項として記録し、次年度担当者へ引き継ぐことが大切である。その際、記録はできるだけ詳細に誰が見てもわかりやすく書かれていることが重要である。

第 章の事業評価の方法と実際に詳しく記述するが、事業実施前と実施後のアンケート結果より、客観的に成果を分析しなければならない。今回の事業では参加者・保護者共に、事前より事後の方が事業のねらいに対する意識が上がり、今回の事業は目的を達成できたと言える。事業の評価を、運営側と参加者側から評価することは、偏りのないふりかえりができ次回の参考となる。

イ 事前研修会の実際

表2 事前研修のスケジュール

時間	内容	確認事項
13:00	<p>野外活動における安全管理の基礎知識</p> <p>講師：日本赤十字社救急法指導員</p> <p><理論></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事故防止のための安全法 ・事故の際の報告の仕方 (報告書サンプル使用) <p><実技></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本手ぬぐいを使った包帯法 ・毛布を使った保温 ・毛布を使った運搬(タンカの代用) 	<p>事故発生メカニズムの理解</p> <p>身近で利用できるものを使った救急法</p> <p>寝てる人の上に毛布を敷く方法</p> <p>子どもでも、複数人で可能な運搬法</p> 
14:20	<p>日程打ち合わせ</p>	<p>食事・風呂・消灯時間の確認</p> <p>講師の入込時間</p> <p>バスの配車時間の確認</p> <p>他の利用団体の確認と調整</p>
15:40	<p>活動場所下見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊棟 ・食堂 ・キャンプファイヤー場(晴天時) ・キャンプファイヤー場(雨天用) ・炊飯場 <p>旭B & G海洋センターへ移動</p> <p>カヌー・釣り体験、沢遊び場所下見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足場の安全確認 ・道路の交通量の確認 ・沢遊びの沢、深さ確認 	<p>施設使用上の規則の確認</p> <p>布団・シーツの使用法を確認。</p> <p>入口・出口等動線を確認、誘導方法を考える</p> <p>移動ルートを歩く</p> <p>移動ルートを歩く</p> <p>炉の数確認</p> <p>日陰・着替え場所・トイレの確認</p> <p>雨天時の様子も予測。</p> <p>B & G前の道路見通しが悪く、交通量案外多い。 安全対策必要。</p>
16:30	<p>終了</p>	